



研究発表論文 函館市内の4キリスト教教会における観光対象化にともなう教会活動の変遷

著者	實淨 和沙, 伊藤 弘, 武 正憲
雑誌名	ランドスケープ研究
巻	80
号	5
ページ	459-464
発行年	2017-03
権利	日本造園学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00148578

doi: 10.5632/jila.80.459

函館市内の4キリスト教教会における観光対象化にともなう教会活動の変遷

Changes of Christian Church Activities Regarding Churches as Tourism Object in the Case Study of four Christian Churches in Hakodate City

實 淨 和沙* 伊藤 弘** 武 正憲**

Kazusa MIKI Hiromu ITO Masanori TAKE

Abstract: Some Christian churches are regarded as tourism objects in Japan. Therefore, it needs the tourism management with maintaining the values both as religious and cultural properties. Such values are created by daily church activities by the church members. This research aims to clarify the changes of church activities in four churches in Hakodate city, Hokkaido while they became tourism objects and discuss the proper management of Christian churches regarded as tourism objects in Japan. As a result, guidebooks and tourism plan by a city government show that these churches have been seen as tourism objects with the image of “exotic”. The amount of church activities which are easy or possible for visitors to participate has increased. On the other hand, some churches separate visitors from church members. Other churches recommend that both of them communicate in some activities. These attitudes depend on the principle of each church and the church members’ status. It can be said that each Christian church has not only meaning as the place of belief in common but also their own meanings along with each principle. Tourist’s activities should be adapted to the meanings which each church has originally and then the image added by outsiders.

Keywords: Christianity, tourism, religious heritage

キーワード: キリスト教, 観光, 宗教遺産

1. 背景と目的

(1) 背景

現代のキリスト教教会（以下、教会）の観光対象化¹⁾は、教会組織に所属していない信者や地域住民・観光者等、外部者の訪問の増加を伴う。同現象は、一方では宗教理解の促進や建造物の保護に貢献し、他方では「信仰の場」の「商品化」に対する教会組織の抵抗感や聖堂（教会堂）²⁾への物理的被害を起こす等、功罪両面をもたらすことが松井（2013）らの研究で指摘されている³⁾。聖堂（教会堂）を中心とした教会空間は、「信仰の場」としての宗教的価値と共に、教会組織によって宗教的・文化的行為が継続して行われていることにより「生きている遺産」としての文化遺産的価値も有している。したがって、聖堂（教会堂）、教会空間、教会組織（以下これらの総体を「教会」とする）への観光対象化の影響を総合的にとらえ、両価値を保ちつつ外部と接する為のマネジメントが求められている。日本の歴史・文化に根差し、その宗教文化に対し一定程度の理解を得られている寺社仏閣等と異なり、日本の教会は、多くの外部者にとって非日常的存在であると考えられる。したがって、観光の文脈においても、外部者から他宗教施設とは異なる認識を持たれていると考えられ、その旨を踏まえた独自のマネジメントを考察する必要がある。その為には、教会を本来の信仰共同体として機能させ、かつ、「生きている遺産」として成立させている「教会活動」（教会組織によって行われる活動）が、観光対象化とどのような関係にあるかを整理する必要があると考えられる。

また、「信仰の場」は、教会組織の活動によって成立する空間であり、教派ごとの活動内容や教会空間の位置づけ・位置づけが反映された空間構造の違いによって観光対象化との関係も異なる可能性があると考えられる⁴⁾。したがって、「教会」とひとくくりにするのではなく、教派を踏まえてその関係を把握する必要がある。

(2) 既往研究レビュー

日本における教会の観光対象化を扱った研究を取り上げ、教会

活動と観光対象化との関係について既往研究を整理する。

木村（2007）⁵⁾は、長崎県が取り組む教会巡礼ツアーに関して、教会観光を取り巻くアクター（観光客、長崎県観光連盟、自治体、市民団体）の動きから宗教的聖地が観光商品化されていく過程を追った。訪れる外部者が体験したいと考える価値に合わせ、教会の管理側がガイドブック等での自らの提示の仕方を変えていることを指摘している。これは、外部からのまなざしという新たな視点が教会に介入したことによって、具体の教会活動においても何らかの変化が起きる可能性を示唆している。

また、長崎同巡礼に着目した山中（2007）⁶⁾も、アクター分析から観光化のプロセスを追った。本来信者の生活・信仰の場であった宗教空間が外部のまなざしを受けることで、「癒しや安らぎ」を体感できる場所」といった新たな意味づけが重ねられ、表出されていることを明らかにした。また、巡礼参加者は信者に限らず、また地域文化や歴史、建築といった、信仰以外の様々な動機を有する人々によって構成されていることを明らかにした。

これら既往研究は、観光対象化された宗教空間では、外部のまなざしを意識したことによって従来の性質に新たな意味づけが重ねられていることを明らかにしたが、新たな意味付けの具体的な教会活動への影響については特定の年中行事や礼拝への部分的言及に留まっている。個別の教会に活用できるような実践的な教会マネジメントの考察にあたっては、特定の教会に焦点をあて、そこでの信者による日常的な活動と観光対象化との関係について総合的に量的・質的分析を行う必要があると考えられる。

観光対象化の観点から具体的な教会活動を扱った研究として、永井・十代田（2009）⁷⁾がある。函館市内の教会を対象に、観光行政における教会の扱いと教会の観光への取り組みを調査し、教会組織が観光対象化に対し、具体的活動の中でどのように応えているのかを明らかにしている。一方で、教会側に与える影響については、電話によるヒアリング調査に基づき「観光客のマナーなどの問題はあつたものの、デメリットとなるような大きな問題は聞

*元筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻 **筑波大学芸術系

かれなかった」と述べるにとどまっている。体験型観光の資源として発展した場合の宗教的価値への影響といった、教会の従来の価値の保護に焦点をあてた考察は充分とはいえない。

(3) 目的

既往研究では、観光対象化に伴い、教会が自身のイメージとして発信する内容や具体的活動にて外部の要求に応えうることが示された。しかし、これらはあくまでも特定の活動に限定されていたり、可能性を示唆するに留まっている。本研究では、既往研究で不足していた定量的分析および「信仰の場」という教会本来の価値の保護という観点から、教会活動における観光対象化の影響を考察する。具体的には、観光対象化される過程を把握した上で、教派を踏まえて、教会別に教会活動の変遷と現状を観光対象化との関係から明らかにし、教会における宗教的・文化遺産的価値を維持しながら観光と関わる方法を考察することを目的とする。

2. 方法

(1) 研究対象

観光情報誌や行政による観光計画で取り上げられている教会を観光対象化された教会とし、北海道函館市内にあり、半径 150m 圏内で相互に近接する、教派の異なる 4 教会（函館ハリストス正教会・日本基督教団函館教会・函館聖ヨハネ教会・函館カトリック元町教会以下、それぞれ正教会・函館教会・聖ヨハネ教会・元町教会とする）を対象とした（表-1）。対象教会は函館駅前エリアと函館山エリアの間で近接エリアと共に市内観光の中心を担う、元町エリア内に位置する。函館教会を除く 3 教会は、函館山と並んで函館の景観として代表される坂の上に立地する。教会の各要素のうち、観光対象の中心となる聖堂(教会堂)の教会ごとの空間的特徴は以下の通りである。

①正教会：初代聖堂が 1907 年の函館大火で焼失した後、現聖堂が 1916 年に建設された。総レンガ造りの上に漆喰塗りが施された白壁と、正教会の聖堂独特の大きなドーム型の屋根（クーポル）を有し、ロシア風ビザンチン様式の代表的建築物と高く評される。1983 年、国の重要文化財に指定された。

②函館教会：現在の教会堂は 1921 年の火災による前教会堂の類焼を受け、1931 年に建設された。同教会堂は都市景観の形成上重要な価値があるとして、1989 年、市の条例に基づく景観形成指定建築物に指定されている。内部は床からシャンデリアまで木を基調とし、装飾を極力排したシンプルなデザインとなっている。

③聖ヨハネ教会：1878 年に最初の教会が建てられたが、火災による消失や移転を経て、1936 年、函館ハリストス正教会が隣接する現在の場所に教会が建設された。その後、1979 年に完成した現在の聖堂は、尖頭型アーチの屋根をそれぞれ掲げた四面が四方に突き出るといふデザインとなっている。四面は各壁面に十字架を掲げており、上から見ると建物全体も 1 つの十字架を為している。

④元町教会：現在の聖堂は 1921 年の函館大火による聖堂類焼後、焼け残ったレンガ壁に補強修理を施すことによって、1924 年に建



図-1 対象教会の位置関係 (Google Map に加筆)

設された。聖堂は尖頭型アーチとアーチ型天井、建物の垂直性の強調が特徴のゴシック様式となっており、司祭館、門柱および石塀と併せて伝統的建造物に指定されている。聖堂内部正面の中央祭壇、脇祭壇、およびイエスが死刑宣告を受けてから十字架にかけられ墓に葬られるまでの過程を表した聖堂両壁のレリーフ「十字架の道行」は、教会が火事に合ったことへの見舞いとして、1923 年、時のローマ教皇ベネディクト 15 世によって寄贈された。

(2) 論文の構成と研究方法

まず、戦後から現在を対象期間として観光の観点に基づく教会の捉え方の変遷を把握し、その捉え方に基づく時期区分を行った。

資料は、認知度 1 位の観光情報誌であり⁸⁾、観光対象として教会を捉える視点の代表性が高いと思われる「るるぶ情報版」のうち、入手可能であった 1995 年～2015 年度計 21 冊の函館地域対象誌、および函館市の観光計画（「函館市観光基本計画」(計画期間：1982～1993)、「函館市観光基本計画 1994～2003」,「函館市観光基本計画 2004～2013」,「函館市観光基本計画 2014～2023」)を用い、写真・紹介文の記載の有無、記載内容を調査した。戦後～1994 年の期間については、函館の観光対象の変遷について観光情報誌を基に整理した小長谷 (2002)⁹⁾および朝倉 (2012)¹⁰⁾が用いた観光情報誌群と両研究結果を参照した¹¹⁾。

次に、「信仰の場」および「教会組織外部との関係に対する教会組織の認識や活動」という観点から、対象教会の特徴を明らかにしたうえで、区分した時期ごとの各教会における活動の変遷を分析した。分析方法は以下の通りである。まず、全ての教会においてほぼ同じ年度に入手できた単年度の教会広報誌¹²⁾から、行事や活動として記載・報告されている教会活動を抽出し、外部者対応に関わりのある各教会の教役者及び信者に対して行った、活動の主な対象者と主目的に関するヒアリング回答とそれに関する資料内の記述を基準に 9 タイプに分類した（表-2）。そのうち、現在外部者参加を認める活動が含まれ、定量的に把握可能で観光対象化の影響を受け得る 5 タイプ（信者自身による勉強会等教義の理解や実践を図る「教えの理解・実践活動」、祝会等信者同士の親睦を深める「信者同士の親睦活動」、伝道集会等外部者に教義を伝え広める「外部者への伝道活動」、バザー等教会と外部者との積極的な交流を図る「教会と外部者との交流活動」、聖堂公開等教会を訪れる外部者に対応する「外部者への対応活動」）の教会ごと時期ごとの変遷を把握した。なお、各活動の回数データは、全ての教会および時期において同様に得られなかったため、上述した区分の時期において実施した活動の数（活動種数）から把握した。活動種数の調査によって外部者への関心の度合いおよび具体的活動における関心の表し方が分析できると考える。なお、教会によっては単年度のデータが得られなかった時期もあり、その場合は、沿革誌¹³⁾等から教会活動を抽出し、活動傾向の変遷を把握した。

また、観光対象化に対する信者の反応の現状について、教会関係

表-1 研究対象

教会名 (設立年)	所属教派	観光情報誌掲載回数 (掲載開始年)	各種文化財 指定 (指定年)	ヒアリング 対応者
正教会 (1860)	正教会	52 (1967)	国指定重要 文化財 (1983)	信者 (司祭の妻)
函館教会 (1874)	メソジスト派 (日本基督教団)	12 (1998)	-	司祭夫妻
聖ヨハネ 教会 (1874)	聖公会	41 (1967)	-	神父夫妻
元町教会 (1859)	ローマ・ カトリック	47 (1967)	伝統的建造物 (1988)	信者 (外部者 対応担当)

表-2 教会活動の分類

主な対象者	主目的	活動タイプ	具体の活動例
信者	教義の実践・信仰心の向上	教会暦に沿った礼拝	日曜礼拝
		教会独自の礼拝	七五三礼拝
		教義の理解・実践活動	勉強会
	共同体の発展	外部への寄付・援助	物資援助
		信者同士の親睦活動	祝会
外部者	維持・管理	教会の管理・運営活動	総会
	教会と外部者との交流	外部者への伝道活動	伝道集会
		教会と外部者との交流活動	バザー
	外部者への対応	外部者への対応活動	聖堂公開

(網掛けは本研究で分析対象とする活動タイプ)

者へのヒアリングから把握した。

これらの結果から教会活動と観光対象化との関係を考察し、教会と観光との適切な関わり方について検討した。

3. 観光対象化の変遷と現状

(1) 函館観光および観光対象としての教会の概況

函館市の2014年度の観光入込客数は道内都市4番目の484万人である¹⁴⁾。民間調査では、市町村魅力度ランキングで2014年・2015年に1位、観光意欲度ランキングでも2015年に1位を獲得する¹⁵⁾等、全国的に高い評価を得ている観光都市の1つといえる。

対象教会は北海道函館市の西部地区にあたる元町に位置し、国際港湾都市として発展した街の歴史を映す独特の景観の構成要素となっている。近年では、教会はまち歩きコースの目玉であり、異国情緒の雰囲気浸れるスポットとして紹介されている¹⁶⁾。

(2) 観光対象化による時期区分

観光の文脈における教会の捉え方から5つの時期に区分した。

1) I期：観光情報誌登場以前期(戦後～1966)

小長谷(2002)によれば、明治期には既に函館が観光情報誌『商工函館の魁：北海道独案内』(1885)に登場している¹⁷⁾が、当時期にかけては教会の記載は見受けられない¹⁸⁾。函館においては、函館公園等の近代都市施設が織りなす「美しい景観」を楽しむ「まち歩き」の推奨と、トラピスチヌ修道院等「異国情緒」のイメージをもつ建造物の観光対象化が見られた¹⁹⁾。

2) II期：「異国情緒」イメージ付与期(1967～1981)

正教会、聖ヨハネ教会、元町教会が観光情報誌『北海道冬の旅』に掲載され²⁰⁾、教会の観光対象化が始まった時期である。観光情報誌『北海道冬の旅』(1967)に「明治を伝える異国情緒」とあるように²¹⁾、函館が新たに「異国情緒」というイメージでアピールされるようになったと同時に、「異国情緒」を伝える代表的存在として上記3教会が取り上げられるようになった²²⁾。また、朝倉(2013)は、1960年代後半から西部地区の教会や洋風建築群が函館のイメージとして定番化したことを指摘している²³⁾。以上から、この時期において、教会は函館に「異国情緒」イメージを付与させたといえる。

3) III期：観光対象確立期(1982～1998)

函館市が「函館市観光基本計画」を策定し(1982)、観光拠点とした西部地区内において、「ロマンと異国情緒を強くアピールするエキゾチックタウンの形成に努める」²⁴⁾として歴史的建造物の文化財指定や、街並み景観の整備が進められる。またその一環として、ロシア風ビザンチン様式の代表的建築物である正教会は重要文化財に(1983)、同教会および元町教会は伝統的建造物に(1988)、函館教会は景観形成指定建築物に指定される(1988)。1998年には函館教会の掲載が見られたことで、観光情報誌上でも4教会全てが観光対象として認識されることとなった。このように観光計画でも観光情報誌でも「観光対象」として捉えられ、観光整備の対象となっていることから、4教会が「異国情緒」あふ

れる函館を代表する観光対象として確立した時期といえる。

4) IV期：外観重視期(1998～2003)

教会の外観が観光の魅力として強調された時期である。観光情報誌では、「元町の風景を飾るムードメーカー」²⁵⁾等、異国情緒あふれる景観を代表する存在として紹介され、教会はまち歩き観光の目玉として扱われる。教会の説明文と写真は外部装飾・建築様式といった外観部分や歴史に関するものであり、内部に関する説明は見られない。また、函館市も、「絵になる街・函館」のイメージを観光に一層活用する為の施策として「はこだてフィルムコミッション」を設立した(2003)。これらにより「絵になる風景」の構成要素としての教会が外部者にますます印象付けられることとなったと考えられる。

5) V期：内部紹介発展期(2004～現在)

観光情報誌では依然としてまち歩きの文脈で教会が紹介され²⁶⁾「函館市観光基本計画 2004-2013」では、教会が含まれるカテゴリが「寺社等」から「都市景観と街並み」に変更される²⁷⁾。すなわち、観光情報誌でも観光計画でも「景観」の文脈で教会が捉えられており、前期の外観重視の傾向が継続してみられる。一方、函館市の公式観光情報サイトが教会空間内での行事・イベントを紹介²⁸⁾するなど、市が教会空間内部の活動紹介の観光的価値を見出し²⁹⁾、また、元町教会の内観に関する説明が2004年度から継続的に記載される³⁰⁾のを皮切りに、観光情報誌が内観や教役者の説明・写真の掲載を始める³¹⁾等、教会の内的要素にも関心が向けられていく。外観を魅力として認識する一方で、視覚的要素や宗教的背景を含めた内的要素の観光対象化も進んだ時期といえる。

4. 各教会の特徴

教会組織外部との関係に対する現在の認識や活動に関して、「信仰の場」という観点を踏まえて、教派の社会性(教会組織外部の人間に積極的・能動的に働きかけを行う性質)・教会空間の位置づけ・現在の活動における外部との関係・第3章で区分した各時期における信者数の推移³²⁾から把握した(表-3および表-4)。

(1) 教派の社会性

各教会の教会活動上の外部者への開き方は、キリスト教信者の使命の1つである宣教や奉仕に対する、所属教派の姿勢・考えに基づくと考えられる。信者向けの手引書³³⁾や教派の関係資料³⁴⁾³⁵⁾³⁶⁾によると、正教会は、信者個人の自己研鑽に大きな宗教的意義を見出すという内向的な性格を有しており、社会性は低いといえる。一方、他3教会では外部者と接触することも信仰生活上で重要な位置に置いており、各教派資料において、信仰生活での社会奉仕の重要性が示されており³⁷⁾³⁸⁾³⁹⁾、社会性が高いといえる。

(2) 教会空間の位置づけ

各教会の考えの違いに由来して、礼拝活動の行われる教会空間は、その構造・意味等が教派ごとに異なる。対象教会ごとの資料を参照すると、教会空間の位置づけは以下のように大別された。

正教会は、個人の宗教体験を信仰の核とし、聖堂はそれが奉神礼によって実践される場とする。その構造(建築様式、向き、鐘、内部構造、イコン、諸設置物)は、「神が私たちと共におられる」⁴⁰⁾という信仰の具体化を図って設計・配置されていることが明示されている⁴¹⁾。同様に元町教会が所属するローマ・カトリックも細やかなガイドラインを設けている。聖堂は「神の礼拝に当てられた聖なる建物」⁴²⁾と規定され、様式・構造に関しては「祭儀を行うため、また、信者の行動的参加を得るために適したものでなければならぬ。さらに、聖堂及び礼拝に関する事物は、真にふさわしく、美しく、天上のことがらのしるしであり、シンボルとならなければならない」⁴³⁾とし、各席の配置や、祭壇の装飾と付属品、聖堂内外の装飾等に関して規定している。同派も、聖堂で

表一 各教会の特徴

教会名	社会性	教会空間の位置づけ	活動における外部との関係
正教会	低	儀礼の場として 神聖な場所	聖堂公開 外部者と信者の接触
函館教会	高	あらゆる人間に開かれた 公的な集会所	聖堂公開 外部者と信者の接触 信者対象活動への外部者受入
聖ヨハネ教会	高	他者との交わりの場	聖堂公開 外部者と信者の接触 信者対象活動への外部者受入
元町教会	高	儀礼の場として 神聖な場所	聖堂公開

表一 各時期における信者数の推移（名） ※ 0 内は年度

教会名	I 期 (戦後~1966)	II 期 (1967~1981)	III 期 (1982~1998)	IV 期 (1998~2003)	V 期 (2004~現在)
正教会	419 (1949)	398 (1966)	258 (1975)	307 (1985)	393 (2014)
函館教会	239 (1954)	227 (1970)	171 (1984)	118 (2000)	103 (2014)
聖ヨハネ教会	358 (1954)	140 (1969)	182 (1985)	177 (2000)	183 (2014)
元町教会	950 (1954)	954 (1969)	701 (1984)	466 (2000)	215 (2014)

行われるミサを教会組織・信者個人双方の信仰生活全体の中心と説く⁴⁴⁾。以上2教会は、信仰上最重要視する儀礼の執行の場として教会空間を神聖視しており、宗教的意味合いを含む規定に沿った空間構造や装飾により他空間と差別化している。

他方、プロテスタントの一教派であるメソジストの流れをくむ函館教会の教会堂は、「目にみえない神を礼拝するための「聖なる空の空間」を目ざし、装飾を極力排しているのが特徴」⁴⁵⁾である。礼拝の中心を聖書のことばに置くプロテスタントは、礼拝のために「特別な種類の礼拝堂をあてにするわけではない」⁴⁶⁾。教会堂は信者に限らず人々が集う公的な場として社会に開かれている。聖ヨハネ教会の所屬する聖公会も、「教会の門戸は全ての人に開かれています」⁴⁷⁾とあるように、教会空間を外部者とも共有する場として認識している。また、「教会の働きも教会の中に限られるものでなく、むしろ教会に属し、教会の一部分である信者が、教会を出て、…キリスト者としての行動をするとき、実はそこに教会の働きの主体があるとさえ言われます。…見える建物や制度は、そうした本当の教会の生命をささえる根であり、エネルギーの供給源であるにすぎません」⁴⁸⁾とされ、教会空間は、そこでの交わりを通して信者が外に出ていく為の力を蓄える場、あるいは外に出た信者が戻り力を補給する場としての宗教的重要性を有しているも、信仰実践は同空間に依存しない。以上2教会の所屬教派においては信仰実践の空間そのものの依存度は低い一方、教会空間は外部の人間と共有の場として位置付けられている。

(3) 現在の活動における外部との関係

4 教会とも外部者に向けた聖堂公開（オープンチャーチ）を行っている。ただし、元町教会では、外部者と信者とが交流する活動はほとんど行われていなかった。他3教会では、外部者対象のクリスマスの催しや文庫活動等、信者との接触を伴う外部者への対応を行っている。しかし、函館教会と聖ヨハネ教会は信者対象活動（「教への理解・実践活動」「信者同士の親睦を深める活動」）においても外部者を受け入れているのに対して、正教会では、信者対象活動に対して外部者を受け入れていなかった。このように、活動における外部との関係には教会ごとの違いがみられた。

(4) 信者数の推移

函館教会、元町教会では、「異国情緒」イメージ付与期以降、信者数の減少が見られている。この要因については、2教会のヒアリング対象者から、教会が位置するとともに信者が多く居住している函館市西部地区の過疎化の影響が大きいとの回答を得た。ただし、同様の地区に位置している他2教会と推移の違いを生み出している別の要因も存在すると考えられる。

5. 各教会における教会活動の変遷

各教会の教会活動の変遷を、活動種数および外部者との関係から把握した。

(1) 教会活動種数の変遷

元町教会以外の3教会は、単年度のデータ（注12参照）から具体的な活動種数の変遷を把握することができた（図一2）。

信者対象活動（「教への理解・実践活動」「信者同士の親睦活動」）の活動種数をみると、観光対象確立期以降、聖ヨハネ教会では宗教行事に伴う交流会や音楽会等が増加している。一方、正教会および函館教会では各種の勉強会や若年層対象の交流会等の活動が減少していた。元町教会においては、以前活発に活動していた教会組織内の団体（布教事業補助を担う「アクチオ・マリエ」、壮年信者による「黎明クラブ」等）が現在休止・解散していることから⁴⁹⁾、信者対象活動の活動種数は減少していると考えられる。

3教会における布教を意図していない外部者対象活動（「教会と外部者との交流活動」「外部者への対応活動」）の活動種数の変遷をみると、観光対象確立期以降、3教会とも両活動の合計が対象教会活動種数に占める割合が増える傾向にあった。

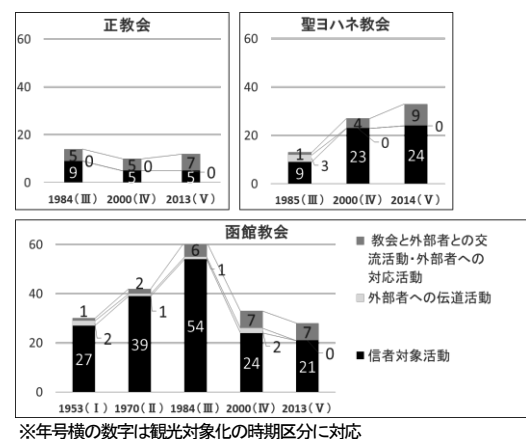
また、開始以降継続して行われている活動の開始時期をみると（表一5）、とくに観光対象確立期以降に、継続的な活動が新しく行われるようになっていくことが分かる。正教会では観光対象確立期に継続的な様々な「教会と外部者との交流活動」や、聖堂公開の通年化が開始された。元町教会においても、観光対象確立期から外部者向けのパンフレットや祈りの投書箱の設置⁵⁰⁾といった「外部者への対応活動」が開始され、その後外観重視期に「教会と外部者との交流活動」の活動が開始されていたことから、同教会においても外部者対象活動が増加していると考えられる。

このように、各教会で教会活動の変遷は若干異なりつつも、「教会と外部者との交流活動」の教会活動全体種数に占める割合が増える傾向は、活動種数の確認できない元町教会を除いて共通していた。また、元町教会においても、信者対象活動が低調になっていることがうかがえる一方で「外部者への対応活動」は実施している。以上から、対象教会では、観光対象確立期以降、外部者との関係が強くなる教会活動の外向化が見られていると考えられる。

(2) 信者対象活動における外部者との接触

対象教会においては、本来信者対象活動（「教への理解・実践活動」「信者同士の親睦活動」）ではあるが、情報発信を行い外部者の参加を勧めている活動（外部者参加勧誘活動）を実施する教会がみられる。函館教会・聖ヨハネ教会では、観光対象化以前から勉強会や教会内組織の例会等で同活動を実施していた。

一方、正教会では、観光対象確立期までは外部参加勧誘活動はみられたものの、それ以降、同活動は減少している。ヒアリング



※年号横の数字は観光対象化の時期区分に対応

図一2 教会別対象教会活動種数の変遷

では、信者の信仰生活と外部者との分離を望む、あるいは分離する意図がうかがえ、外部者勧誘活動の減少にはその意図が反映されていると考えられる。元町教会では、外部参加勧誘活動はみられず、ヒアリングから、市内の他教会と合同で行う信教の自由を守る集会といった、キリスト教信者向けの活動のみ確認できた。

すなわち、函館教会、聖ヨハネ教会では信者と外部者とが接触する機会が設けられている一方で、正教会と元町教会では信者と外部者との分離がみられる、あるいはお進んでいると考えられる。後者2教会の同傾向は、並行してみられる観光対象確立期以降の教会活動の外向化とは対照的な動きであると言える。

6. 考察

(1) 教会活動と観光対象化との関係

教会の観光対象化の過程を大きく5つの時期に区分すると、函館の「異国情緒」イメージと共に始まり、そのイメージが継続していることと、外部（行政や観光情報誌）の関心は外観のみから外観と内部へと移ってきているということが明らかとなった。

教派の特徴より、対象教会は儀礼を行う教会空間を重要視する傾向の強い「儀礼空間重視タイプ」（正教会、元町教会）と、教会の実践において社会性が高く、教義に基づく教会活動実践上教会空間に対する依存度が比較的低い「開放性重視タイプ」（函館教会、聖ヨハネ教会）に分けられる。外部の関心が、教会内部にまで及ぶようになったことをふまえると、信者対象活動と外部者対象活動の双方において信者と外部者との交流機会がみられる「開放性重視タイプ」の教会は、教会本来のあり方を保持したまま外部の需要へ応えようと考えられ、観光との親和性は高いと考えられる。

対象教会では、行政（函館市）による教会への働きかけが始まった観光対象確立期以降に教会活動の外向化が見られた。このうち、「儀礼空間重視タイプ」であると共に観光対象確立期に「外部者への対応活動」が開始された正教会および元町教会では、文化財指定による公開要請という行政の直接的な働きかけが同活動開始の契機となったことが明らかになっている⁵¹⁾⁵²⁾。観光情報誌掲載回数や「外部者への対応活動」の開始時期をふまえると、同2教会は、外部による観光対象としての認識がより高かったものと考えられる。本研究では対象教会への認識の違いの理由を特定することはできなかったが、「異国情緒」「絵になる街」の代表としての教会が求められていたことを考えると、坂の上に位置し、教会建築様式としての代表的特徴を有する正教会・元町教会は観光対象としての需要が高いと推察される。これに関しては、聖堂（教会堂）の外観・内観、歴史や立地等に対する外部者の認識に対する更なる調査が必要と思われる。また、文化財指定を受けていることが該当教会の注目度・認知度を向上させていると思われる。

一方、「開放性重視タイプ」の函館教会と聖ヨハネ教会では、同じ「教会」である正教会・元町教会（観念的周辺）において行政による観光対象化が見られた観光対象確立期に「教会と外部者との交流活動」の開始・増加が見られ、「外部者への対応活動」は観光対象確立期よりも後の時期に、自教会の観光情報誌への掲載あ

るいは外部者の訪問を契機として開始される⁵³⁾。両教会の物理的周辺と、観念的周辺の観光対象化は、一方で2教会の外部者に対する貢献意識を増幅させ、他方で外部者の「教会」への関心の高まりを生んだと考えられる。元々の教派の特徴と行政による間接的な働きかけによって教会と外部者双方の意識が互いに向き合ったことで、外部者に目を向けた「教会と外部者との交流活動」が展開され、その後2教会においても観光対象化が進められていく中で、「外部者への対応活動」の開始、「教会と外部者との交流活動」の活動種数の維持が見られるようになったものと推察される。

「儀礼空間重視タイプ」の2教会では、信者対象活動において外部者と信者の活動上の分離がみられたように、信者のみの活動形態を確保しようとする意図がうかがえ、「開放性重視タイプ」の2教会では、信者対象活動において外部者参加勧誘活動が多くみられた。しかし、地域の過疎化の影響を受け著しい信者数の減少が見られた函館教会では、外部者への活動を思うように実施できていないという声が聞かれた。同教会組織における観光対象確立期以降の外部者対象活動の活動種数は、増加傾向にある同じ「開放性重視タイプ」の聖ヨハネ教会と比べてほとんど増加しておらず、上述の信者状況の影響がうかがえた。

以上、教会活動と観光対象化との関係をまとめると、観光対象化は教会活動の外向化をうながすと考えられるが、その開始には教派に基づいて教会空間の意味づけが異なるという内的要因と、直接的・間接的な行政の働きかけという外的要因が影響していた。また、その後の展開は、教派の特徴および信者数の変化という内的要因によって、各教会が各々の形を示すことが明らかとなった。

(2) キリスト教教会と観光との関わり方

教会空間は宗教的価値を有する空間として信者の生き方に深く関わることから、「信仰の場」として存在している。一方で、同じ「信仰の場」といっても、教会活動の変遷を見ると、教会ごとに外部者への教会空間・教会活動の開き方が異なっていた。各教会は、「教義に基づく教会活動実践の場」という意味づけを基盤に、教会ごとに異なる「教会空間の位置づけ」が加わるという二層の意味づけにより「信仰の場」を築いている（表-6）。対象教会においては、観光の文脈において、外部の関心が高い教会は観光との親和性が高い「開放性重視タイプ」の教会ではなく、「儀礼空間重視タイプ」の教会であったといえる。この外部からの関心と観光との親和性との不一致は、教会空間に対する、「信仰の場」としての意味づけよりも、「異国情緒」イメージ付与期に形成された「異国情緒」イメージという外部の期待への対応が優先されたことに依るものといえる。これは文化財指定が「異国情緒」のイメージに沿った観光政策の文脈で行われている点、観光との親和性が高い「開放性重視タイプ」の教会よりも、観光的需要の高い「儀礼空間重視タイプ」の教会の方が、観光情報誌掲載回数が多い点から推察される。「儀礼空間重視タイプ」の教会へのヒアリングでは、外部者の増加が信者の信仰生活を妨げるのではないかという懸念の声が聞こえた。このように、教会活動の外向化により、教会を神聖視する信者の精神的負担が増加している可能性が見られる反

表-5 「教会と外部者との交流活動」および「外部者への対応活動」における継続的な活動の開始時期

教会	活動タイプ	I. 観光情報誌登場前期 (終戦-1966)	II. 「異国情緒」イメージ 付与期(1967-1981)	III. 観光対象確立期 (1982-1998)	IV. 外観重視期 (1998-2003)	V. 内部公開発展期 (2004-現在)
正教会	教会と外部者との交流活動			諸活動 開始	バザー 開始	
	外部者への対応活動			聖堂通年公開 開始		
函館教会	教会と外部者との交流活動	バザー 開始				
	外部者への対応活動				オープンチャーチ 開始	
聖ヨハネ教会	教会と外部者との交流活動			バザー 開始		
	外部者への対応活動					諸活動 開始
元町教会	教会と外部者との交流活動				でんけんコンサート 開始	
	外部者への対応活動			聖堂公開 開始		

表－6 教会空間の意味づけにもとづく教会タイプの分類

教会タイプ	教会空間の主な意味づけ		観光との親和性	該当教会
儀礼空間重視タイプ	教義に基づく教	神聖な儀礼の場	低	正教会 元町教会
開放性重視タイプ	会活動実践の場	他者との交流の場	高	聖ヨハネ教会 函館教会

面、教会活動上見られた、信者と外部者が分離しているという傾向は、外部者の教会の内的要素への関心にも対応しきれないことを示している。一方で「開放性重視タイプ」の教会では、外部者との外部者の来訪に肯定的・積極的な姿勢がうかがえたが、観光との親和性が高いと思われる同タイプの教会においても、ヒアリングでは外部者によるマナー問題が聞かれた。これは、全教会で共通基盤となる「教義に基づく教会活動実践の場」という教会空間の意味づけへの理解も不足しているために生じたと考えられる。

(3) 今後の展望

教会と観光が持続的関係を結ぶには、観光対象化に関与し、外部者による教会空間の意味の理解に貢献しうる主体(信者、行政、マス・メディア等)が、「教義に基づく教会活動実践の場」の基盤の上に「教会ごとの教会空間の位置づけ」が据えられ「信仰の場」が成立しているという教会空間の二層の意味づけを考慮した開き方に向けて行動し、外部者がそれらを理解した上で教会空間を体験することが望まれる。教会の外的要素だけでなく内的要素にまで関心が及んできている現在の傾向は、見せ方によっては、上記二層の意味づけが尊重される状態を促す契機になると考えられる。

本研究は JSPS 科研費 26283016JA の助成を受けたものです。

補注及び参考文献

- 観光情報誌あるいは行政の観光計画への記載をもってそのものの観光対象化が始まったと判断する。
- 礼拝施設の名称について、後述する対象教会のうち函館教会は「教会堂」、他3教会は「聖堂」と称している。本研究も各教会における呼称に準ずる。
- 松井圭介(2013):観光政策としての宗教-長崎の教会群と場所の商品化-:筑波大学出版会、160-161pp
- エドワード・レルフ(1999):場所の現象学-没場所性を越えて-:高野岳彦(訳)、筑摩書房
- 木村勝彦(2007):長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム:長崎国際大学論叢7、123-133
- 山中弘(2007):長崎カトリック教会群とツーリズム:哲学・思想論集33、176-155
- 永井恵一・十代田朗(2009):キリスト教会と観光-函館を事例に-:日本観光研究学会全国大会学術論文集24、169-172、170pp
- JTB パブリッシング総合媒体資料:<http://www.rurubu.com/adsales/dom.html>、2016. 11. 20 参照
- 小長谷悠紀(2002):新日旅行観光情報誌に見る函館エリアの観光対象:立教観光学研究紀要4、37-42
- 朝倉俊一(2012):函館の観光地イメージの構造について-そのブランド力の源泉-:日本観光研究学会全国大会学術論文集27、117-120
- 小長谷論文にて分析対象とされた書のうち、垣貫一右衛門編(1885):商工函館の魁:北海道独案内、生見堂・北海タイムス社編(1967):北海道冬の旅、北海タイムス社・JTB 編(1975):ポケットガイド1北海道:改訂6版、日本交通公社・ブルーガイドバック編集部編(1981):ブルーガイドバック 北海道、実業之日本社・朝日新聞社編(1982):旅の百科、朝日新聞社集英社編(1983):四季日本の旅北海道、集英社・JTB 編(1995):旅のノート北海道、JTB・リクルート編(1998):じゃらんDE北海道1998-1999、リクルート・JTB 編(2001):るるぶドライブ北海道2001-2002、JTB、および朝倉論文にて分析対象とされた書のうち、栗谷川健一(1968)山溪カラーガイド14カラー北海道、山と溪谷社・坂口よし郎(1972):カラーブックス247北海道の旅、保育社・マガジンハウス編(1973):アンアン1973/5/20号、平凡社・JTB 出版事業局編(1983):るるぶ1983・7月号、JTB・JTB 出版事業局編(1986):るるぶ1986・7月号、JTB・JTB 出版事業局編(1989):るるぶ1989・7月号、JTB・JTB 出版事業局編(1994):るるぶ情報版北海道①1994-1995北海道、JTB・JTB 出版事業局編(1997):るるぶ情報版北海道①1997-1998北海道、JTB・JTB 出版事業局編(2001):るるぶ情報版①るるぶ北海道2001-2002北海道、JTB・日本交通公社出版事業局編(2007):るるぶ情報版①るるぶ北海道2007-2008北海道、JTB パブリッシング・JTB 出版事業局編(2012):るるぶ情報版①るるぶ北海道2012-2013北海道、JTB パブリッシング
- 参照した各教会の広報誌および以下の通りである。
会報編集委員会編(2009-2014):函館正教会報、第9-39月号、日本基督教団函館教会編(1954):1953年度総会資料、日本基督教団函館教会・日本基督教団函館教会編(1971):1970年度総会資料、日本基督教団函館教会・日本基督教団函館教会編

- (1985):1984年度総会資料、日本基督教団函館教会・日本基督教団函館教会(2001):2000年度総会資料、日本基督教団函館教会・日本基督教団函館教会編(2014):2013年度総会資料、日本基督教団函館教会・函館聖ヨハネ教会編(1987):1986年度受聖餐者総会資料、函館聖ヨハネ教会・函館聖ヨハネ教会編(2001):2000年度受聖餐者総会資料、函館聖ヨハネ教会・函館聖ヨハネ教会編(2015):2014年度受聖餐者総会資料、函館聖ヨハネ教会
- 参照した各教会の沿革誌および以下の通りである。
函館ハリストス正教会史編集委員会(2011):函館ハリストス正教会史:函館ハリストス正教会・日本基督教団函館教会編(1994):日本基督教団函館教会創立120年記念誌、日本基督教団函館教会・日本基督教団函館教会編(2004):日本基督教団函館教会創立130年記念誌、日本基督教団函館教会・日本基督教団函館教会(2014):日本基督教団函館教会創立140年記念誌、日本基督教団函館教会・函館聖ヨハネ教会編(1983):函館聖ヨハネ教会沿革史、函館聖ヨハネ教会・函館聖ヨハネ教会編(1998):函館聖ヨハネ教会沿革史 後編、函館聖ヨハネ教会・函館カトリック元町教会150年記念誌編集委員会編(2009):栄光150年、函館カトリック元町教会
- 北海道経済部観光局観光戦略グループ(2015):平成26年度北海道観光入込客数調査報告書<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/toukei/H26_irikomi_honbun.pdf>、2016.08.28参照
- 株式会社ブランド総合研究所(2015):第10回地域ブランド調査2015調査結果
- JTB パブリッシング2014編(2014):るるぶ函館大沼:JTB パブリッシング、26pp
- 垣貫一右衛門編(1885):商工函館の魁:北海道独案内、生見堂、66pp
- 小長谷悠紀、前掲論文、42pp
- 朝倉俊一、前掲論文、119pp
- 北海タイムス社編(1967):北海道冬の旅:北海タイムス社、51-52pp
- 同上、51-52pp
- 小長谷悠紀、前掲論文、40pp
- 朝倉俊一、前掲論文、118pp
- 函館市(1982):函館市観光基本計画:49pp
- JTB1998編(1998):るるぶ函館道南1998-1999:JTB、35pp
- JTB パブリッシング2004編(2004):るるぶ函館大沼:JTB パブリッシング、4-7pp
- 函館市観光部観光振興課:函館市観光基本計画2004-2013:33pp
- 函館市観光部:函館ハリストス正教会の「ウクライナまじ」:函館市公式観光情報はこちら<http://www.hakobura.jp/deep/2012/12/post-221.html>、2013.8.8更新、2016.08.27参照
- 永井恵一、十代田朗、前掲論文、170pp
- JTB パブリッシング2004編(2004):るるぶ函館大沼江差2004-2005:JTB パブリッシング、6pp
- JTB パブリッシング2014編(2014):るるぶ函館大沼:JTB パブリッシング、26pp
- 1954年度の函館教会、1969年度の聖ヨハネ教会についてはキリスト新聞社編(1956)および(1971):キリスト教年鑑:キリスト新聞社を、その他の年度については教会の広報誌(注12参照)、沿革誌(注13参照)およびヒアリングを参照した。
- ダヴィド水口優明編(2013):正教会の手引き 改訂:日本ハリストス正教会教団全国宣教委員会
- ニコライ・ドミートリエフ(2013):連続講座B 箱館諸術調所Ⅱ期 函館のたから-老舗シリーズ第3回 函館におけるハリストス正教会道 150 年余の歴史-資料
- 函館ハリストス正教会史編集委員会(2011):函館ハリストス正教会史:函館ハリストス正教会、214pp
- 函館カトリック元町教会150年記念誌編集委員会、前掲書、163pp
- 日本基督教団:日本基督教団社会活動基本方針<http://uccj.org/wp-content/uploads/160540014b457242bb983fe16b3e22e9.pdf>2016.11.27参照
- 日本聖公会ホームページ:日本聖公会とは<http://www.nskk.org/province/Seikoukai.html>2016.11.27参照
- 第2パチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会訳(2014):第2パチカン公会議現代世界憲章(1965):カトリック中央協議会、43-52pp
- 日本正教会:「かたち」:日本正教会ホームページ<http://www.orthodox.japan.jp/tebiki/katachi02.html>2016.11.27参照
- ダヴィド水口優明(2013):正教会の手引き 改訂:日本正教会、145-149pp
- 日本カトリック司教協議会教会行政法制委員会訳:新教会法典(1992):有斐閣、643pp
- 日本カトリック中央協議会:ローマ・ミサ典礼書の総則(暫定版)総則288:<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/library/book/sosoku2.pdf>2016.11.27参照、44同上、総則16
- 日本基督教団函館教会「日本基督教団函館教会の紹介」(未公開)
- 谷口美智雄(訳)、パウル・ティリッヒ(1978):ティリッヒ著作集7:白水社、35pp
- 日本聖公会教務院編(1968):信徒ハンドブック:日本聖公会教務院教育局・伝道局、75pp
- 同上、77pp.
- 函館カトリック元町教会150年記念誌編集委員会、前掲書、122ppおよびヒアリングにもとづく。
- 函館カトリック元町教会150年記念誌編集委員会、前掲書、164ppおよびヒアリングにもとづく。
- ヒアリングにもとづく。
- 函館カトリック元町教会150年記念誌編集委員会編、前掲書、163pp.
- ヒアリングにもとづく。